
A.W.S

神代 修平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A . W . S

【ΖΖΠ—Δ】

Ζ4594D

【作者名】

神代 修平

【あらすじ】

神に選定されし一人の青年を中心に回る、運命の物語。眞実は、探求する者にしかその背を見せない……。

第0話・終結の決闘（前書き）

いたむかダークファンタジー。

第0話・終結の決闘

序幕

§

荒れ果てた荒野。

草木は無く、水は枯れ、土はひび割れた不毛なる大地。
されど、万物の生命の母たる偉大なる大地。

一切の生命の存在を許さない灼熱の地平線で、三人の神による戦い
は続いていた。

今の人間の暦で言つところの、約1100日間。
ざつと3年間だ。

「くそつ！　まだ目が醒めないのか？　レム……エイルスッ！！」

雷光を纏う片手剣を持つ男がいきり立つて叫ぶ。
そして剣で空を両断するかのごとく薙ぎ払うと、剛風を併せた斬撃
の波動がツバメのように低空かつ高速で滑空し、佇む少年に襲来す
る。

一方、怒号を叩きつけられたかと思われるその長髪の少年は、口元
を禍々しく歪め、左手を前に翳した。

すると、少年の手前で波動は大きく甲高い悲鳴を突き上げる。

斬撃は高音を境に間もなく一つに裂けて別れ、少年の後方で小さな

光の粒子となり、消失した。

「ククク……脆い、脆いよ。哀れだねえ、アルヴァレイド。その程度を以て『武神』かい？まあ、僕と君、竜と赤子の差くらいは致し方の無いことだけど、まさかこここまでとは

「

透き通るような無邪気な少年の声が、紡いだままの口から響く。その声に、斬撃を放つた男は憤慨したように歯牙を食いしばった。

「レイドー！ 手を休めるでない！」

もひひとつ怒号が飛ぶ。

若々しい女の声は、女性の身体が最低限隠れるようなローブに身を包んだ女から発せられた。

傍らにいた女は、最初はわずかだった地面からの距離を大きく広げ、遙か天から両手を合わせた。

刹那、金色の弾丸が風を切る。

「……無駄だよ、リウム」

少年の眩きは接近してくる光の空氣との摩擦音にかき消される。そして少年に着弾すると、あたり一面を地面深くまで灰燼に帰すほどの大爆発を起こした。

爆発の端音は、地平線の遥か彼方までもを搖るがし轟いて消える。

しばらくして渦巻く砂塵が薄くなる。

少年の足元は数十メートルえぐれているが、少年は何事も無かつたかのように元の位置に浮いたままだ。

少年は呆れたようにため息をひとつだけ打つと、掌に真紅の小さな焰を宿した。

「もうイタチゴッコは終わりにしようよ。僕だって、いつまでもごっこ遊びの餓鬼じゃあないんだからさ」

少年の身体が手から発生する禍々しい朱に包まれ始め、やがてそれは宙に浮かぶ少年の全身を包み込んだ。

さながら、赤い卵が浮いているような印象を受ける。

「あれは……レーヴアリアか！？ やめろレム！ その術だけは使つてはダメだ！」

剣を持つ男が一度、剣を振り払つて赤の卵に説得を求める。しかし、返答は豪炎が燃え盛る、耳障りな異音。

「もう遅い！ わらわとおぬしで止めるしかなかろう！」

上空から女が怒号のような口調で男に飛ばす。

女の激を受け、男は感慨深そうに眉をひそめて、深くうなづく。

「そうだ……あの術式が発動すれば、『また』この世界に人類が芽吹いてしまう……世界が……悲しみで満たされや」

「アル、畏れているのか？」

「フツ……畏れ、か」

(俺の場合の生きるといふことの代名詞か、それは)

男は少しの思考の後、下らんな、と自虐するかのよつな口ぶりでつぶやき、吐き捨てた。

紫色の鋭い電流が迸る片手剣を掲げ、より一層のあばれるような雷を剣に注ぐ。

そして右手で無刃に素早く剣を旋回させ、剣と己の担う責任、双方の重さを腕の感触で確かめる。

バチバチ、と空気との接触を嫌惡するかのような悲鳴が研ぎ澄ませれた刃の切っ先から轟つた。

俺はここにいるぞ、と存在を主張するかのようだ。

「アレの呪文詠唱の時間は20分。その間に炎界防壁……レーヴアリアを突破するぞ！ 遅れずについて来い！」

「誰に物を申すか。遅れをとらぬよう留意するのは貴様の方ぞ」

薄い笑いを浮かべつつ、女はパン、と虚空を押しつぶすかのように両掌を身体の前であわせる。

そこから生じたのは、眩いまでの超高压縮エネルギー体、白い粉雪色の輝きだった。

次の瞬間から一人の波動攻撃の乱れ撃ちが始まる。

幾百もの容赦ない斬撃とエネルギーのブーストの波状攻撃が、ポツリと浮かぶ黒朱色の卵に嵐の如く殺到してゆく。

しかし、朱の壁は攻撃を寄せ付けるどころか、寸前でその

すべてを熱によつて粒子状に解してしまひ。

「まだだア！..」

「お前は余力を残せ、リウム！ こざといつ時、世界再生を担うのは女のお前なんだぞ！」

「馬鹿者っ！」

くつ、と苦しさを噛み殺した女は男の忠告を無視し、先ほどまでは比較にならないほどのペースで光弾を連射する。手を休めぬまま哀愁を含んだよつた視線を下方の男に落としたかと思つと、自棄したかのよつた笑みを男に投げかけた。

「お前を失つた世界で生きて、意味など無い！ わらわはまた独りだ！ お前こそそだつただろう！？ 冷たいフラスコの中で何を想つていた？ 何を願つていた？ それを思い出せば、死など痒いわッ！」

男は思い出す。

希望を託され、度重なる狂うよつた苦しみと悲しみ、重圧、それを血肉とし今を生ける『自由』を手に入れた。

求めたのは愛。ただ純粹な、人を想う心。

それさえ封印された2メートル半径の世界で、20年といつ月日は長過ぎた。

「………… 同感だが、だからといつてお前と心中などゴメンだなつ！」

会話はそれを最後として、一人は意識を攻撃に集中させ、20分間を数限りないほどの攻撃回数で埋めた。

しかし、不条にもその時は訪れる。

「……ノロケ話も聞けなくなっちゃったね。仮にも武神と魔神ともあるつものが、なにを戯れているんだか」

突如として赤い卵が嘲るような声を発する。

言葉を言い切ると、少年を覆っていた炎は天へと弾け、弾けた赤い断片が少年の両手へと収束していく。

最終的に、空を踏んで空に乗る少年の両手には「この世のものとは思えないほど、禍々しい色が張り付いていた。

その両手に一瞥をし、少年は高らかに、さも愉快そうに笑う。

「終わりだよ。僕が生み出す新たなる『世界』。呪われたツヴァイン・ヴェーリーなんかじゃない、真にヒトが救われる世界！ その誕生と一緒に忌々しい君たちを葬れるなんて、粋な喜びじゃないか」

そして少年は朱と黒が交わり、もはや炎ではない両手のそれを併せて、高々と天に掲げた。

「まづい！ リウム、アイギスを張れエ！」

「急ぐな今やつているー。」

上空の女の両手からは、今までとは明らかに異なる、濃度の高い銀彩色のエネルギーが発生していた。

しかし、充填が遅い。

「焰の神の御剣を冠する力……僕の前にその力を示してみろオ！！」

少年が両手を振り下ろす体勢に入る。

「炎剣・レーザンティイン！！」

風を切る音を響かせつつ、少年が両手を振り下ろす。刹那、天地を裂くかのような巨大な炎の刃が、地平の彼方までも延びて消えた。

二人はそのライン上で、為す術なく炎の渦に飲まれてしまっていた。

大地は裂け、地響きが悲痛な糾弾を突き上げつつ、その星はその日、誕生してから刻んできた歴史に無かつた程の高音に包まれた。

すべてが終わった後、雨が降った。

沸騰するマグマの地熱を冷ますかのように、轟々と。

やがて溶岩は押し固まって大陸を形成し、雨は海を創る。

海は有機体生命を育て、それは大地へと進出して文明を為す。

そうして、歴史は紡がれてゆく。

『三神人の伝説』

世界に、その名だけを残して

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4594d/>

A.W.S

2010年11月23日04時34分発行